57X
27
60

てるくに

宇治巻
初段名さくら

東京都立中央図書館蔵書

このころ横川なる僧都（そうづ）といひて、いと
ゆうとうとき人、そこなりやそぢあまりの母（大尼ぐ）、ことし
のいまだしきなりとて、ものをもまゐらず、
てうじむつまじうやんごとなくふでのあざり
とをよみて、仏経をやうずるこころばへ、
ゆゑくもてゐるこころちしてゆゑ山（大尼）こえ
ものほどりこのくものあまぞこころあり、うし
ろめたくていつぞのこころをおこし
つんともてさはぎてうぢのとりもちうり
ものの家ありけるをとめて、ふだらりやをも
なりて行いとうづみ入ばゝ横川（よかは）よりそこにぞ。

（信教）山ごもりの日いとくどくいそぎとぶられど
限のさ陵ちかやのごちの殿まそるくやるんと
おどろきていそぎまゐりおしむべくも
あらぬ人のさ陵とぶげうまでこの中よもげん
あるてぐらくさぐを家あるぐこうてぐうく
けさうじちけをいうかいさまへる人のとまく
ちやこ結いくぐさうとろめるげよちていひろれば
（信教）さもいかべきとらいとなりうさていとをげく
むつうもあれぐうやうめしなるべこうよちち神
やるぐりてれいすう結ろいをべうければ故
（東福院）東福院の殿仏まの殿といひ一石ぐいろう

ちうんとちひいぐ院寺（信教）ちうめりうれぐ
一二日やぐうんといひひよやつ結へりうれぐ
ちるちん姫日うれまりよけうていとあやしき
宿もりのおされとうびておてうろかつ（仮寺）まうば
ひいうぐちう院のちん殿ぐうて（信教）めれ地ちうでの
人いつるすぐやうう結ういへぐいとうちりなは
やけぐうちうれど人もるく心やすきとうてうきう
やるる結ちれおされれいもくやうう人へとこるうひ
ちりうれいとろそうるうちうひるぐてうちう
（信教）先（信教）教いうり結いうぐいくあれておそううげるう
所ちるとこまてだ（羽）ちこちう強ちめちるの結この

もつきをひろしあぐらとふちどやうなる
の面ひらりおるまごとのあるようつぐしさ程の
下らう法師よ火をもさきて人もらめうもろの
ろこいさろりまりとゆるまのしるこうと
ぎけのつりやとこ入るるもろさものいろ
ぎりるるぞこゆられいかぞと立さりて火とか
くるしてられいまのくねるもぐるりさつひの
変化（へんげ）しるかまてるあくいさんとてひりは
いますうあゆこるういまひりいあるようかよ
るめもれちんとひてやうのもれしぞく
ぐきおんつりつてきすぐまるぬまるうらから志

つこあらびありめへるこ心ちするまこれ火をまし
ゆ犬ところぐりもあくあふなさこ面まてちか
くりてその面をこれバがるはちぐいやく
さてたるまの根のいとあくしこるより
めていうりうくめぐしこるもべるれ
侍所（さぶらひどころ）の内坊（ないぼう）ほいんぎこせはらびやといへをげる
あやもこさるとりてひりいまうでくるる
こいるぐ中て（侍所司）こるつのの人よ変化（へんげ）ろといかりる
ふけぐまぐこめ地るりてけぐりりてかり寸（ほど）
つり（几帳を）結んんまるこるりてでどぐもこれ
もぐしこを河しぐ所ぐあるべこること

ぞと。ろいろうは。いそぐまれなりそれぞ。お
ちげまうるどーろうよ。ぐ四五人してこうるう
地をろうよ。ぐろうとくもるー。おやーうて時を
うつるまでろうとく。数もあけてあん人うるま
でいろあしかうんと。心ようべさ。言やろうぞ
ひろうて。心ろうよ。ろうやはもあんうれし人
ありさろうよ。ひざうのろうあもれまあるずよりて
うへなくろうる人ろはあるめまてあめれば
ろうよろうひろう人をすてくろうけうがようこげへりうう
といふなるのさる人をうれ侘のうちうまてて
ひうんぐろひまとうよ人ろうとをうつひこ。やうう

法師と詞

伝教詞

もれくおざひしてろうもてうろうんまうこそ作るめ
ゆくおびんまも作れけげくのあるべろ。ろまうそ
作めれといひておりひ。ろ宿りのおのことをうぶ。
山寺のろうもいとありそろ。おやしの家海口
ひさいとあげて。ゆさろう。愛まいろうさなるらや
ろう作。ろとあんあるうてうすれば。ろうひ去
つうまうろあり。ろれ。まのもくまるん。時ぐあや
しさひざるんて作ろ。たろいしの秋もうるま
作ろ人のまのろうろ作ーとりてまうで
ろうくうとも。ろおざろうず作ろさそのちぐえ
ろうやろうとう人ば。ろうて作ろさ。狐ハさうそハ

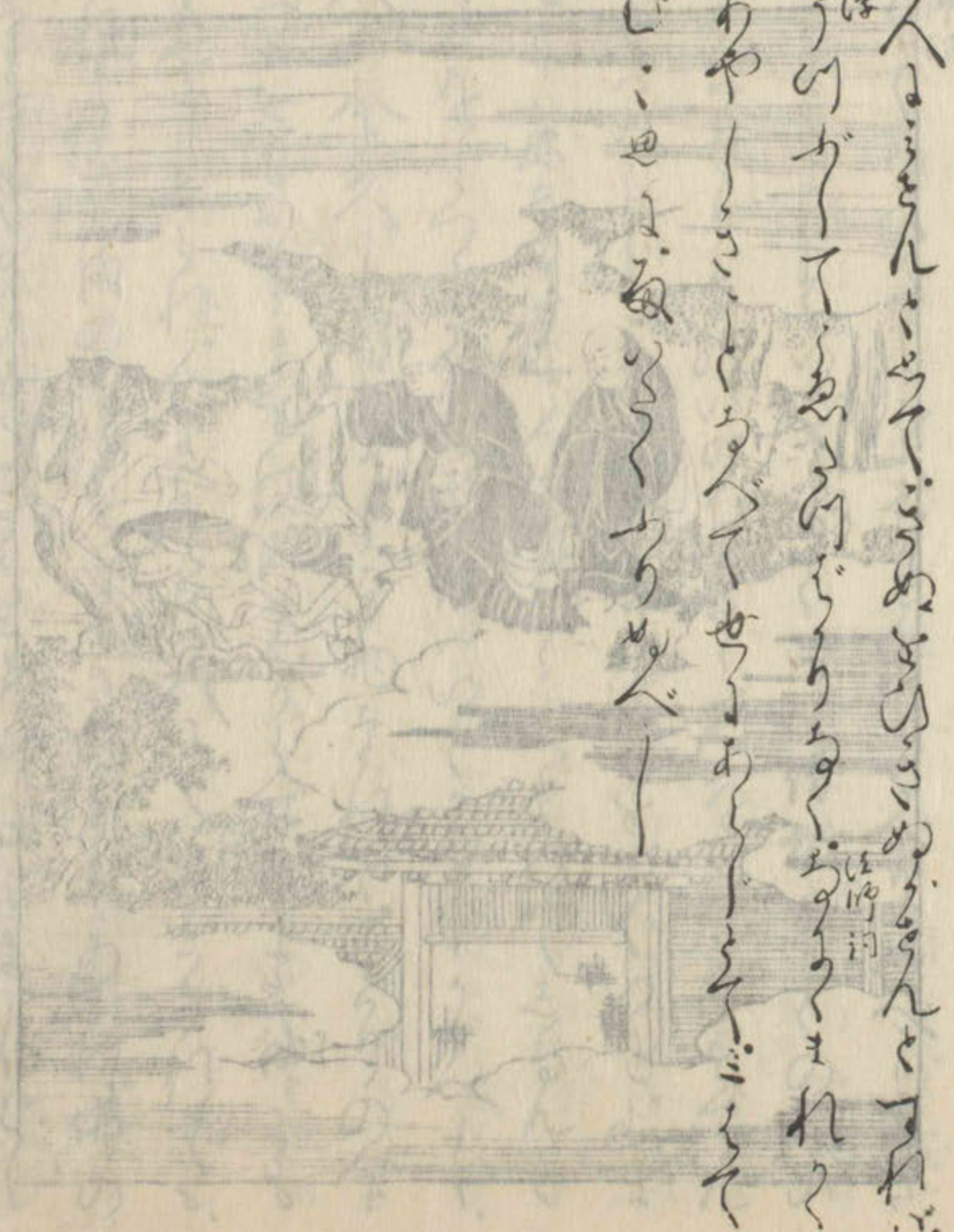
法師詞

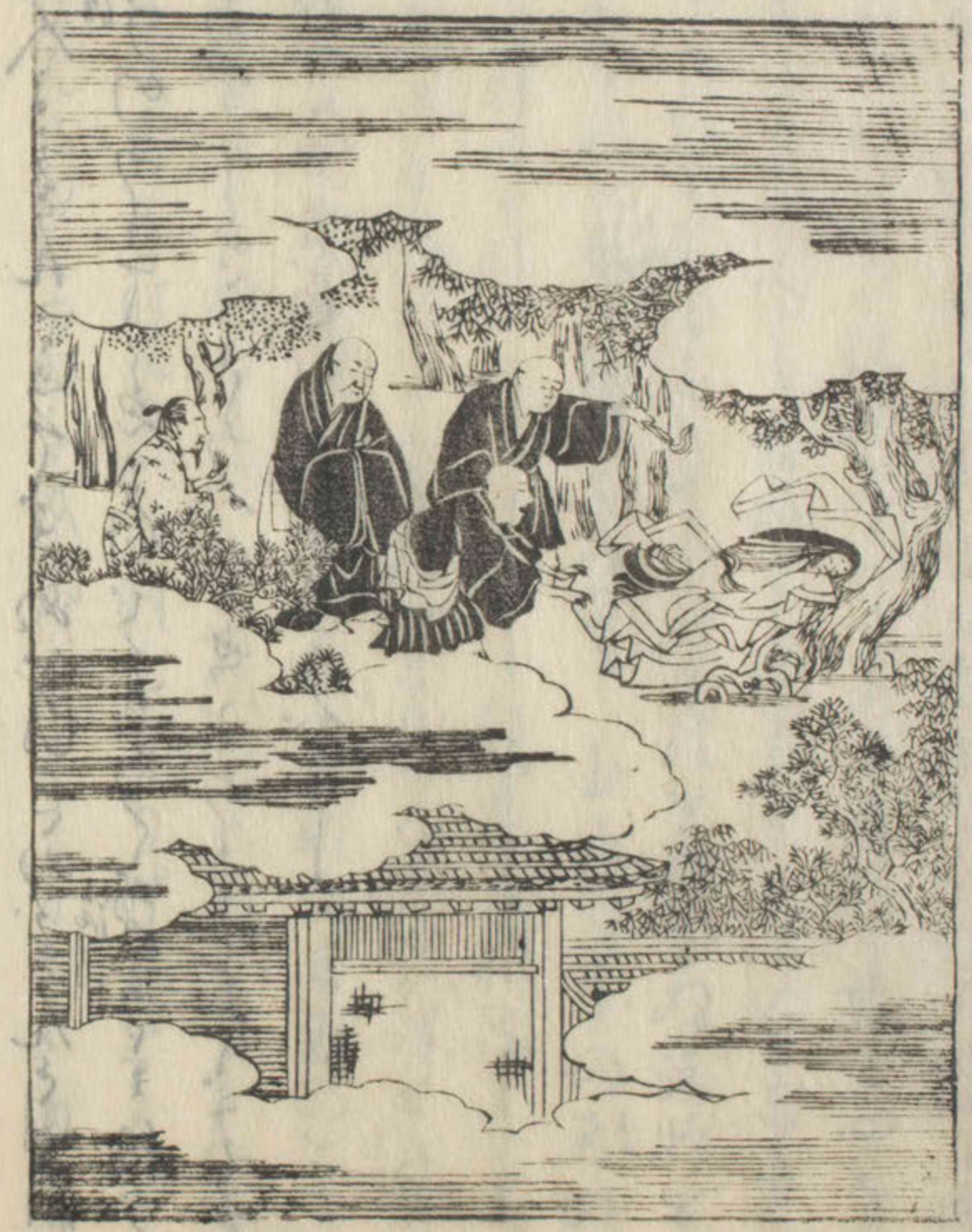
伝教詞

法師詞

人をさびやかすべくこゝにもあらぬやいとゝ
いとなれうれ東方ふるさと新りまく面に心を
ふきこうるうべし。信都さうぶやうのものゝこゝる
ひざかれらくこゝにて。こゝにもれもとゞをめ法師と
ふきこうれば。鬼ヵ神ヵこゝにむかぶりの天の
下のけんざれおりしまうすまはえうれまじ。
ゐをりのゆへくとこゝあとうてひけば法師とひさ
いれていよくるくいでゐるされのまむのさる
やまさくれちんやこゝのけゝ角をうんと
すゝ。芳ゝけんゆもられもうけめさくや
あうんとひくつけられ。れもいうさ角を

人ようをんさゝてこゝあとひさめうんとすれば
ほうけがてゝ忘れけ。法師ちゝうちまれく
あやしさとうべてせるあゝそこゝこそ
じゝ。迎ようあゝくうちやべし





くてをいそぎてとりめぐりしらさ
のまくよりそいづくあといつ法師初まくの人の
ゐるちりそれいのちあをそらくもそん
といいそぐこそくるり池よりくいを山よ
ちく麻をぞよ人てりくれてきるんと
すをそつくすけぞんいとうるしうべし
人の命久しうまづ和ぞれどのそりの命
二日ともしまずはあべらず鬼よも神よも
つやうぎれ人よおられ人よりごられて
れまそこ風のそよとすべら和まそあれ仏の
ちるぶそらひまぐらいちりれ心そよしぐ

ゆきのまをちぶくてうすけ心ちんつるきめぐく
いふうざりはあるずとのあてこのちさうて
いぶうきつれさせあ民でーどもいぶくーしさワぎ
れいうきつワぐひ法人のれあうはうきめ地
をうりいれて、けぐーひちるぐきちんとす
さ、まぐくまあり、又地の変化（てんげ）はもあれめはるあく
いけう人をうう毎はうちうーちるくきんいうで
ううくちれいちぐ心ぐはいつふドをちぐいをさい
ぐく地をうてのひちすれもれば人うはぐ
うめうれのうはちんあをうけうれ（九四）ちる後
ううてあり法ほぐいううーぐり法うてワ

うう、ううーうけまり法（法師）人いぐちり
めるうひあるはくくうてあれをいうずい
ううちーけるうず、ちるう地はけぐれはけう人る
うてというをいはううとの尼ぐ、けぐすぐうふ
法師（法師）ちくくのうう根ちんう六年はあううう、光ぐう
ちう地をうあへううとの法（尼）ちうくまるどのが
ちはうてうーう義ありうさいうやうちる人ぐ、ぐそのう
う後うんうちるうてのう法（法師）ぐうこのひぐーのやるぐる
ちんけるうやけうんぎうくうへぐいそ（尼）ぐりて
ううう人ちうりうけうぐすてうきうりうう
ワうりうちうーけるう女（ほ）のーううきあやのうあ一

つけそひねうちうめ人られどこめれそうる
なうくれば いとづくよちるそどうそ恨あつひ
さはぐそうさすぐよいすぐめそあげちぐつ酒の
つきそすちるづくを（尾志河）あるる心うやいとづくそうる
ちふ人のそうよ仏のそうちびさめへるとこ心夢ゆる
さひちくちり給そぐ中ちうとやおもそん
そうべき歎そそそくこはあるをいくうね
の給へといひづれど（注河）うそうていそむうり
そもおやさちうの人ちり人よそでうこの
河よおもいれそちいとふ（尾志河）まれ
まれもの給されうとちるあるいとづやふか

ちれいくの給ぞいうそてそうあはちくく
ひるぞそくへども（注）地もいとぞ歎めも（尾志河）ちよもしそずか
どやあんそてそれど（注河）うくくそゆう有ちるく
うひてそれいあさまくくうる所そそ人の心
まどそそんそて（注）出さそうりの地ちやそうそふ
二日どりそちりおて（注）ちくりの人を行そうどうすう
ふそそず（注）おやちさくふちをふそそくぐちつりの
ドちうどの信旅ちつそうまちりけうくておかく
ちすちりそそちつひそうぞうるもあれどうりうど
ちていふをそけば故八（ドキノ河）文のれ（ひとの 主）女ちれ歎のうそひ
給しどそちちやそ給くてはつるそうれ

をりとて、はぎゆかん、その中にそこの歌よみ、
はこうまつりゆかとて、暮日いえにまつりゆくごりあき
ふぎやうの人のこ屋にゐて、暮のとりまて、こうるる
まやとうまも、けうくあるまれともはぎえ、
おやうくかそうしとはぎと、人べこやれ
ぬいまつるくきつ、きくこそこそこしとと
つふぎく、はくくこそぎて、いうあくうる、はくごり
しくいつけどひとうへて、えるぎこひ西し
けれ、おもはぬ、ハ、文のれ、ものまつりくいうきなて、年
はこうりあり物ぬ、ふれをいつるあうん、非文を
ふくまりまて、うまこ、ふくこ、ぎつふ、おまぬ

ふくこ、ありまぬ、ぬもあるめれぶくうこてあ
るよ、人こうかくもんもひんるそえるこの人へ
れいくこうけりみちのほどもいぐものし結
うんいと心こうこそいひあへう、車ふて
しておいへのりまへるまはづうまけるのま
ふうづぎのうはひ人をきてうるはくよい西
ひうのうこひて、ふもぐ、ぬもやず車ふあて、
ゆまうちぐ、結ひえぎけるとゆという所ぞ
ふこう結けうそこるおりてほどいとこをし、中
やどうそこまつくべこりけうちぐいひて、車ふけて
おうつうあ、結松いおやとあうひひすあのあ西

だいこれをしめ人をしてづてこれいづきわろ
しつやまむ（ただ）おいの病（やまひ）のいけもものきづろうとも
ものへしをなのうづろうそをづしつひ治
れやうくろうろうろうり治るれば僧都の
ぼりあめうろ人ちんおてこそろるど法しの
あろうはろめくろれいづろうし人ろは
ろ〇ぢず尼ものれろちづきをひ（尼元八）ものも（おの薬）
ろ人もやあろくろふもちづ心ちしいそころ
ね中べのもむあろうるろ人ちあづれけん
ねまうでちづくろうけり人のづちるづひひ
けんをまめちぶやしの人のうりてどきろ

ものちどそろりけり河よるづてもいひし
一言ろうはる祖もろもの治るの〇ぢいとあ
つろるくろていつしろ人よもちてえんとさる
つづくろてあろあづろうるくいとおやしう
のろものしの人づあるいくまづこ人ものと
ひるづうちすろんもいとしいろづ長谷の観音
ぢうもし生てづくめのういのきあづり
ろもびやるろ新樹三巻子と焼るるこ（新樹三巻子と焼るるこ）くとをせのおけうへそ
あけうるるど四五月ものあいとらびしう
ひるろくをろびて僧都の御涙（文覚）ものあり
のてこの人ろけあへさずるそうまでもあろ

ことはいでれどのみひあやしぶうまで
ぶはうとぶやけのうまぶしぶぶ
ぶくこまりる山をむなでずるるひとの
あるるんをちひさうぶ法とあまてあん
いとさまくるべしとぶしでどもいひて
人ぶさきぶくすぶ法ぶいでぶるまださき
ちられむ（左慚）ぶんの法しまていむこれ中ぶ
やる飛いぶるあどのすぶつけてまぶ
そちりさぶあやまつこちるこちひ六十
あまりて今更人のもどさかうんいうべきる
こそいあるのみくぶふうあ人のまれをびん

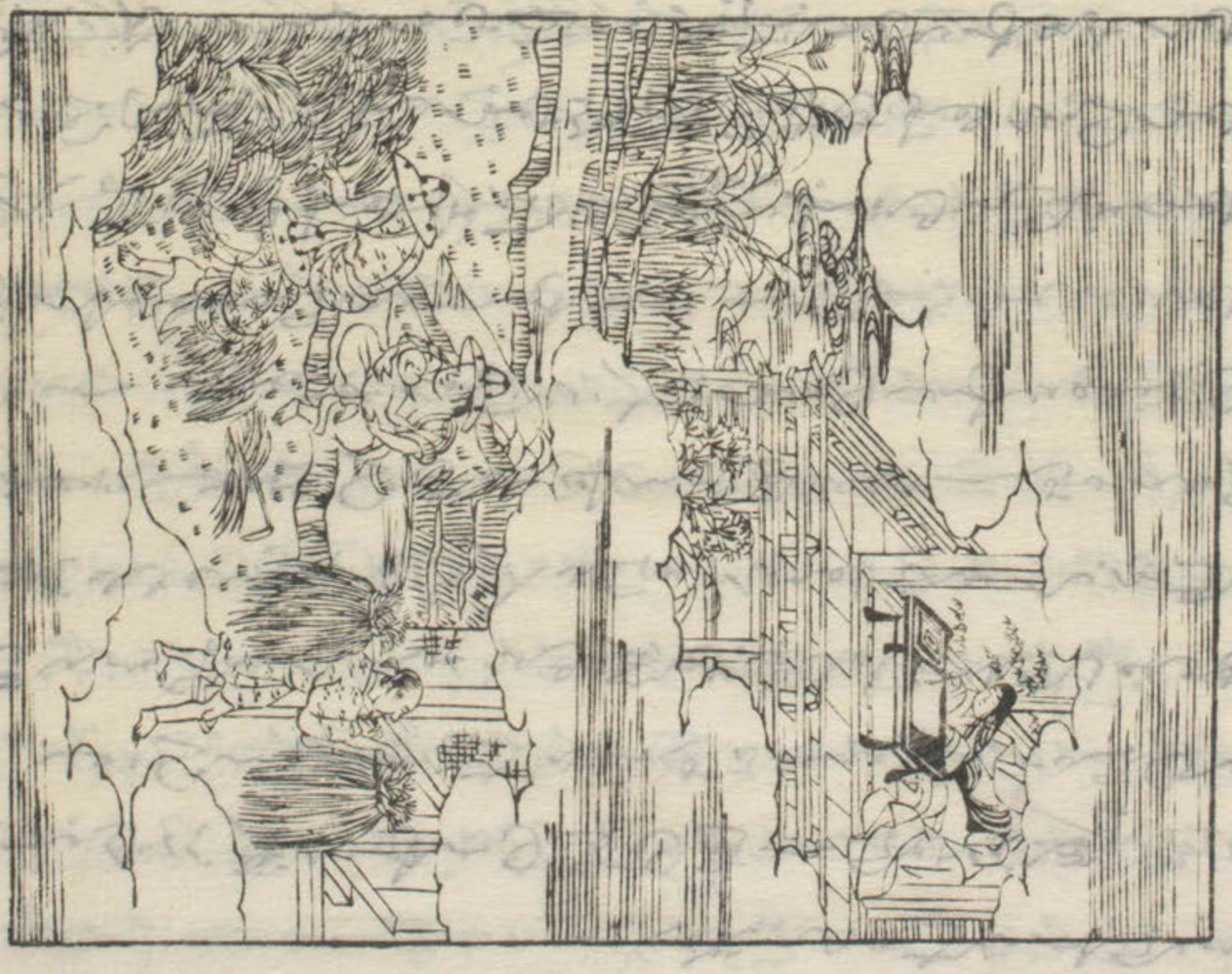
ぶくのひるぶ仏法（ぶつぱう）のさずとるりれる
こるうとぶ心ぶうぶずさていふれ仏法（ぶつぱう）の行る
ぶうこまるぶくぶうぶをちひあて
秋ひとぶうぶくのくるぶ月ぶ人ぶ（ふうふつ）
りぶて行やうの和くぶ人をまどつこうでと
ぶりぶ雨ぶりいこまるぶまのあぶり
ちうぶいるうぶ法自ぶろいいたくもぶれ
ぶつるのけそうきれて（ねのうち）のれいこまで
あでこてくそうれてまうべきまと
わぶ苦いきこちひきぶ法しのいきうるる
せるうこひきぶめてぶひあうこぶる

きちんとぞうけてうあ
へでぞうけていさ海り
う人の命をれいとき
まうげまへでもれまり
ちぐ〳〵ゆくしら
なるやきてゆうこ
ゆるすこうれ〳〵心アゆる
ゆるるすしあてよ
そのこうんいくべうまあ
でうとのの人いつ
げうれう海をいうで
うはるしてまつ
んとてぞうでぞりを
そざめういぢりとう
けをてまつうろまく
まれどもとりあれくきう人の心をえきう
ちくきあてもの結ぶず信拾今いうぢりまて
いうとりやうてまつ
うへといひとそのぞり

あ尾張のやうう人をさきまうれと尾張ばうり
できあてはつすへつれぐうぐう結ぶび
りあうまーあさゆひてうやりつれどいくて
まうれずうきてそれいつやくとけうらり
一年ありけーもぐこ留うあ結てめをあやる
いうぐき天人へのあまうぐうれうとうこうやうこう
もああうさ心うすれどうぐうどくいとぐりいこ
ぐくこゆうれ心をへぐてくこうあいぐくようれ
とまへ人のうこあまはいうでかうきぐをとめて
うをいとうぐうこうてあやーりーれまうれ
うまやあんありけんう海ぐも文はうくゆとず

しとふひるれどいとさびしくありて
頃はもあてつるり若の山里ちへこのをさ
るどやるりけりぬ風ゆへあの春ちはも
さらく前栽ちどもはしくゆへとけてう秋る
るりゆけばそのそこさも長ちると門田のるる
そ所るつけさもれまるびしつうさ女ぬいう
ちひけらじわへりひさしけるさもはしくこ
しあづまちどのくるどもちられて夜夕暮
の家と所のかりしし山里ちりへ今きこいりて心
よりけりさ都ちれば松ぶさげく風のさもるる
ぶさきよつれくよさちへ入きちけくばけく

ちくさのやちり尾ぬ所ちとあうさ秋ハ野
ちどひさのふあ物の尾ぬ所ちどいつ人へ琵琶ひさ
ちどさけくあそぶくうけたちるやつれぐ
ちるちくしもしもすやしうけ月まて心
のどるさやうのくすべこ風どもちりしつぶ
いさうちしこ風ちるもすもあひ出りこるる
れとくこちすざまけう人の心をやるちり
ちるつけていいちづちる紙あさちくれそれ
ちけうく紙ちどにちしくればるるひる
ぶとちげ湖の河のこやこ風こちげ
こけてこれうこぐ先



あり畑をはりてゑうんかるゝ人も
ゐるしまゝよろぶことなくこゝひ
こゝろれこゝしゐをるどもありくいとぞこゝ
ひとさ人のこゝ山里よりかゝひえこまゝ
りこゝひさゐりれがでいくこゝへよけ
あま七八人ぞつるのひとこゝていまけそれ〳〵
むまごやうのまだ家よりまづ人すゝもこゝ
ゝてあゝもゝ記ぐゝぞこゝ海
つけて。こゝひこゝりよいこゝひけゝやうの人よ
ありこゝとゝれまもくこゝれそまつゝんこゝ
つゝくゝこゝづこゝこゝへべいゐゝこゝ海ゝてこゝ

ら人けんゐどゝやゝまゝづずあやしゝこゝ人へこゝ
こゝへゝこゝ人へゝぞこゝけてもこゝずゝぐゝ伊豆ごまさ
こゝて。花だのひゝ人へよこゝりけゝりけゝをのこゝで。
これれゝこゝよいひけゝりけゝこめも心ざ海も芳
こゝ家ゝ者よいこゝこゝこゝゐゝよゝけてゝ
世中よあゝあ家ゝこゝこゝれよやあんゝぞけゝ
ゐこれけゝくゝのこゝ人へよこゝけゝゝこゝのびゝ人へ。
海こゝよけゝりけゝこゝゝ人へあゝひゝこゝも
畑し結んゝて。こゝこゝこゝあゝ人へゝこゝもこゝ
ゝず。おゝま赤の芳のむこゝれ赤いゝ尺中ゝこゝて畑し
結けゝ。おゝうゝこゝれぞんゝゝの赤傍初のれゝもこゝり

れ〜結けう山ごもりをとうとひよりと
うこの花ざちつるのよのぼりう樓門よりうたの
さうりよりきて中ほうこうおりうさいうち
ひておてやうるかさそれいりうるをこいつ
て遊びやうるかをきし一人の出貞任けうひそさや
うるさ出らうくこれもいと心ぼそきすまのうれ
づれるれどすうきさうくふまれさうげう
かうこうるうてかさぬようへうちるでこも
ぬるうくどそれへしきやうるど嘆ちぐめ
さうは色このうりあすぐるのをのこぜのワさ
ぬるうてうきみもるるぐうきぞくうてこれを

おまてよるびをへれぬうちちうめてねうり
うち共七八のほどまてわびぐのひ心ちるぬ
うあ面まてつけうりのまぐ花うぐうちるまうて
てうめて結まうちちるまてのけより
まはをまうるうけど泣くのうちるん行かを
山里のひうるるまちきてうすうとのうち
忘ぐやう行くぬをういあやくぐあうと
のうまへ心のうち衰よ過ぐうくのうぐも
るへれぬうるうをおるぐちるすうるれ
ぐうるれ貞任よそうこうりうるん山ごもりを
うくやうるるをうち行くをるぐうるぐ

たゝひまどいさう〳〵へ
ぐるゝ海ぐゝやうよ
ゆてゐんゝ笑ふいゝれ
のゆふ凪ごゝりのれう
ちゝゝれまもびゝ
れゝゝゝゝゝゝゝゝ
るゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
やうのゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

ふうらくさろうもよどもさのくるし　もいと
おしさすぐるあり（ほう）ぬまへるくるこ水ぐみの
おりしろ心ちのこし法よ中拍殿をくへそて
まつれぶいと表よこそおるぐ仕事のさ陰うて
おりしまさをやいとうされあこひるんしと
ひあくる資（ほう）おれいこぐやせるありていうあを
いるもくへよこんこ拾られつけてでひしのの
こくさ生ろべさ・さやうのすぢいさくてちゐん
さやふおまだいりめくるまる陽（ほう）らうと夜の毒色を
こまづこひてが拍（かはたく）いひしくへの忘とこくちりて
ひこをめくへりむ（ゆはり）ひくへくこれこくよまれ

きこらんやとさちすぐしまいりくること
こくちりよこをころあさこやこれもく
れれ拾こんちどの拾（かはた）づうまりれましひく
よて表ちりし学のくよくも生こつぐるれ（ばはり）
らうのひま入ひくる拾陽こくうまれは
きぐれのひまりちべてのさ陽こふあまぐうり
こ人のこらこれこうこのこくひるる世をこ
めくるあこりよされぞくちんこおどろうれひると
の拾（ばはり）姫表のくら出めくりつうころてをこのくり
りこちりこくこてあて陽こるここくこいこうの
こまりのひちんくしこ学の人いこくよるくをこり

ゆえりしそこなまぐさ志ゆうとさこうろ
ひとつるこそ（ゆわたり）ゆつ（尼ぜ）れとけどくるぐ
ま、ひのあり（ほ）しぼしめひとえそそ
まつりなて、あけられの足地よ宮人結ゆうとうら
とけのへるゆ有信をいそくはしんじつんと
ゆ（ゆわた）ゆ、とくこそは有名れとゆ（ゆ）てゆ（ゆ）べ
なしむげよいとかしこうつ（ほ）のこりつ成
中くゆ、ゆ（ゆ）ゆ海こまえどそのまくまもいと不
とのゆ（ゆ）こそこてめ（ゆ）てんとのこゆへゆ（ゆ）ばんうつ
けるとひこゆんもゆ海あ（ゆ）こそこうして有も
やこゆ日も言めべ（ゆ）しとのこゆこゆ（ゆ）べのこうれて

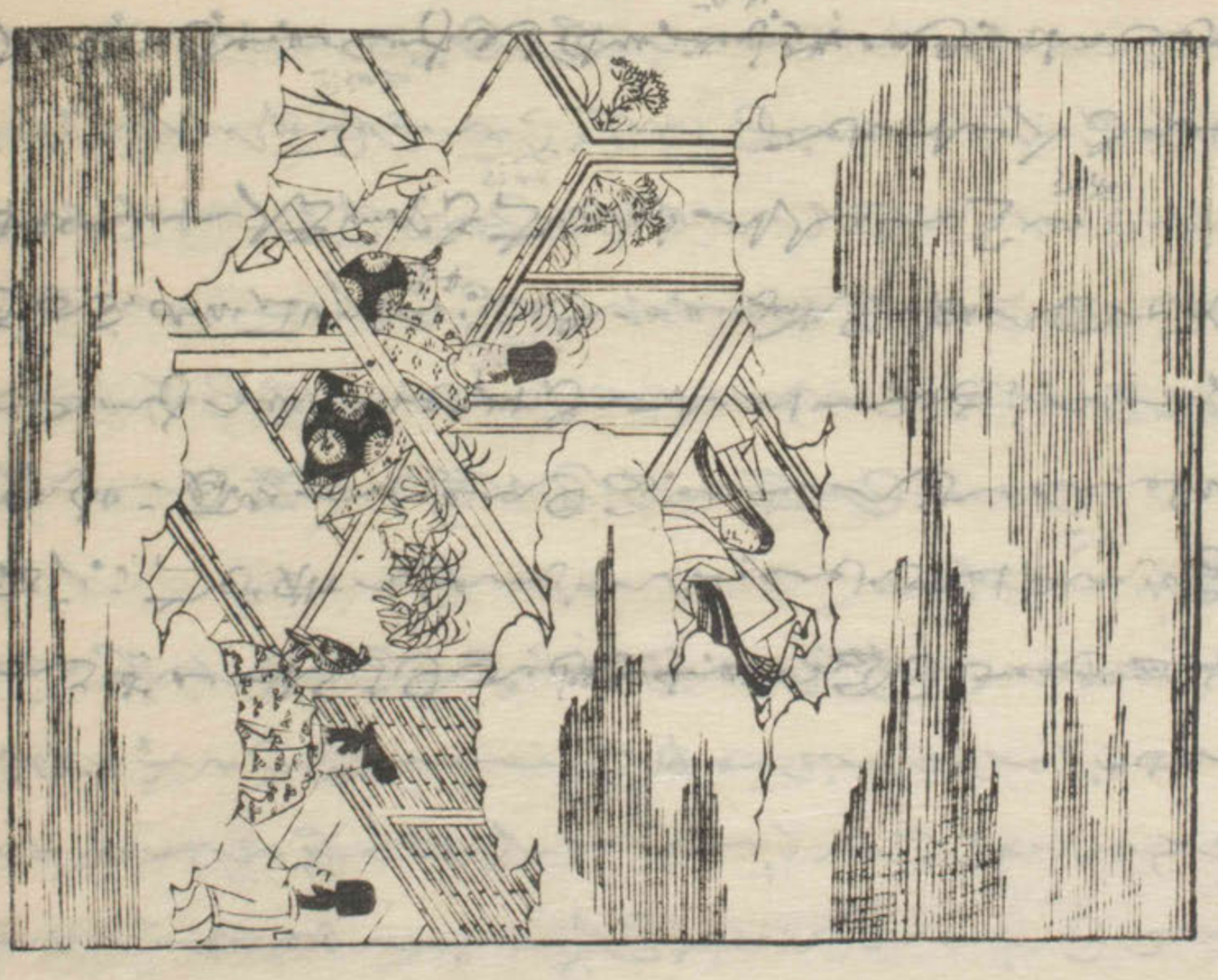
出のふまへらこそ（ゆ）ゆ（ゆ）れへしをゆりて、ゆ（ゆ）にまれ上
らんとこらすこそ有ゆ（ゆ）ひこりこそこそ（尼ぜ）へのあれ
いひとこそすこ有ゆ（ゆ）ゆしこゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆこそ海ゆ
へこそ海ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）

ざりけるやうの所なきさまにまでこそ侍る
ことあれ。明石にうち侍りしのごとく
のがれて海やゝんあひんちかくぞうとの浦
ぞうでの浜にて月をくいけるまうでくあやうく
ゝ必ずうちくさるんこそ侍りてあるとあれば
うち面ゝまいとゝ寸。表ちりけるとれいうちの人へ
ヨクのゝんせ中とうしとそでさう取はふくれね
けりてしてして物べのうちらもすうれとくの浦
まこの日ゝうち給よりさいとくちんとそなくて
うちうべさ心づひしうちれば芳を出さう
れまちひのかれのあまるども。袖どちう海と

ちれども袖にいくいのやめるあまを忘ふまれて
浦伝ひのつゝそよ。通びうち給んに
誰ようとひのふいづくれど。泡のうまも
うけのそげをうてしげちんもなやくそ。
忘れ侍びていとゞつゝふうのを絶つ
ちぐうあこの月ゝちるこのふる人はなんいう
ちるふとまれ忘げさ海まそ世ちうと
人ゝうれんゝをうしげゝそ袖をうれば
うう谷のそこまはれるゝ。ゝうんやゝ思
つ侍をいそうけうさあゝふう世治つうんと
いふうちつけ心まそまのうんまゝ山ゝさ

きちのごとくにさてしのべしおきてそしよふ
らんくるまつけてはしりとくまくべてはまでさきる
そいいるますぐるせをうしろ路ひとふりぐ
あさてぐやちぐくゆしげるのふぐ路とそ
くうげみる
あぐしの風ちひとれをうれへしまれ
ちあゆちんらくくとどうくかれの足してそ
れうりはまだもこのてれ足れうりくをの人
いくこころけつさのくるひとれがうちろめくる
くもあらぐとそぐのうをばいとあやさくをば
いぐうくそくくるぐらくちるさくく

ちりとておまだ(又行)きせつるやうまづぐ人
まめ人くそちん(左衣)ぶくしくへてふぐれをれへしうを巷
とくくく草の屋よりあり(中れ)ぐくは(左衣)ちりめ
べくくゆくてうりれ文ちぐりくやくん
くすぐうねくしうは(左衣)のくうくさ陸ハ志ぐ
地ぐくんすぐちるぐくくくくくど表れぐ八月
十日あまりのほぐよふ鶯ぐりのつつてるおり
こと



孫びいこそこうつ絡りんようきなるこあ之歯
よるんこ伝れど例の人こていあらじいと
引くあるまで世伝根こ絡りれべのこうすくるこ
ふもひのへざる今ことこむきゆうはいふこあの心
ぼこくはばし伝し物伝世伝こあるこうこうこて い
つあるいうぐこるんこ人伝るこあやぐりていつ
尼夫注ノ方へ
いりてもおるさけるる伝いここうこてもふしあへ
こうれすうねいすぐろるここも表しふこそ
れつるのこくるれるぐこうこへていつへど人へう
浮付
れここあるんこうるるぐこもいうひ
るくのこここぶこつれるこてうしあへうあ
中ノ方

とはいづくあるゆうこ紙をちぐれるふすうこ絡る
こそありそれるぐこうこうこ
中ノ方
蛙ひしの声をこるてこうれどもこあるぐ
うこの家よまどひあ尼夫ノ方れいこあれこうれをぐる
るぐこひれぐこ浮んこうこんこうこいひい
でんもこく心うくこまこいひこあてこうう乃
ありくこあこあれんもひつこうおばゆれこ
いつへどこここ絡るぐこあるりいつこひこくこ
あへりおまだもやこいまめここうへこすぐあり
けるるぐりこすこべし
尼夫
秋の時こつ西
ゆけここうこうこひぐこ

をげれば、ものいはぬ者ようにけかとうんづくりつ
ぶやくといふを、はぶちよりもれく心よりほうよせる
ありとこそれくぐひとりをいとくちばと
心のうちをいはんで、おさばさこ、ものもあぢきなきけ
を、ひとりの人、たれべうくおもひたるさつでまうち
くこひ、さて、語らんとする心うり外よせるこころ
めくいこし語りあはれを、大鏡のくこにくくく

られようつけて表わるゞ。げんちうでうをいとかうく
ゆて。いうこうこゝばとの給むすあれはまごゝられも
ゝうこうゝのすゝ和ゝて。ゝ花ゝ。ゝ花ゝ。ゝ花ゝ

いつまでもちぎりさいうらぶ。人ぐいこゞうとゝ
へどそうげをうへうめ。げようれへていひ
きゝまれば。ゝとゝ。うてまうせうりうをて。
こゞつまれ笛のをとも。ゞゞとのがうろを
やつりて。おづまれさくべとけまさやうまさふ。
れゝとまれをゝ。ふやめつをゝれをのこめで
ゝろとゝて。けうち。ばりくゝうゝれゞどうさ
ゝへ。ゝやりうまひさうと紫どもつりゝく
ゝめさゝういとゝ。ゝうゝ海の世ゝまさゝしぬ
ゝゝゝとゝてゝひゝ結ゝれとほ江れがゝんゝほのぐ
ゝゝゝ

をへるさせゆへ世ごれ
まで也ゆるとあるとと
らぐらぐげるゑもと
尼ぜ
苗の者は芳のことも
袖ぞぬれて
ゆりあり風はおいびと
りてとありめづら
して
とづれつるぶくひつ
ろいあれぐちする地
りもやうくさ野
尼ぜん
めぐくはせさぐしさ
尼ぜん
ぐらびたうたう
尼ぜ
てさめて
みぎわ
あやうう地ふたうあやとまで
ほう
ぐう
ふぎ
ぐく
ぐく
ぐく

うれしてゝ、ごりやうぢうてまつで、なりそうりいざ
ゆへ人へやいたゝんとする。ゆゑ、ぢうて、仏ゐれどもやうも
所をとこゝろひさうゐんもきてゝ、ゆきゝあ
ゆうとそぐのゝ、こゝろつれど、はんぞうゝ、ぶめれとゐど
やうよいひさゝせつゝ、ゝぶゝ、まうでさきゝな。
うひゐきてよゝそあめれ。今さへ心よりゐ、ぶゝひ
ゐきさいうゝでゝきあをとゐるゝといと心うさうちよも。
きゝゝぬへよゝてゝきうゝちのありさをきゝてえ
ゝとゝそゝゐそゝゝく、ゐゐ心ゝきゝさ海ゐは
いひもゐきて、心ゝちのいとあゝうのゝゐれがゝやう
ゐゝんゝちの程よもいゝくゐるゝゝぶつゝまゝうゐんと

の程、尼君、とゝぢ、ハきゝきゝゝめべきへゝでゝうとゝて。
ゐゐてもゝのゝれきゝゝ、ほゝれゝてゝゐる川のゝきをよゝふゝゝも
ゆゝゝゝ二まゝくの枝、まゝゝとまゐゝひよまゐりゝうを尼
だゝうゝて、尼君汐、二ゆハまゝゝもあひ男ゝんとゝゝふ人
あゝべゝゝとゝゝゝれゝゝをゝひあてゝうよゝひ。
つゝれてゝゐてあゝあゝるゝゝふとあゝゝゝやう
つゝさゝゝゝ

そこは人ずくなるようて
心だらをあるおのおまた
ひとくいたりぞ
りをとめいそ
ちぶくも今もいぐ
ひとりもし
いとつれぐ
ちくいへど
つれぐとさ
までもちぶ
いとあやう

はちんを心ぐ
たまたまつて
ぐめりけ
おきまこ
をたもひ
ちんとされしべよりあへ
めこをあかれと
ぎあるよ
れをずいぐひとも
れとをいて
れ碁をあへ

うえとあば
ぶてをさせて
おまけてをとを
ちんをさせて
ちんこれれ碁
りよりし
まをめて
ぶせいぶ
れごの
ちんをつ
とめをる
うのまひ

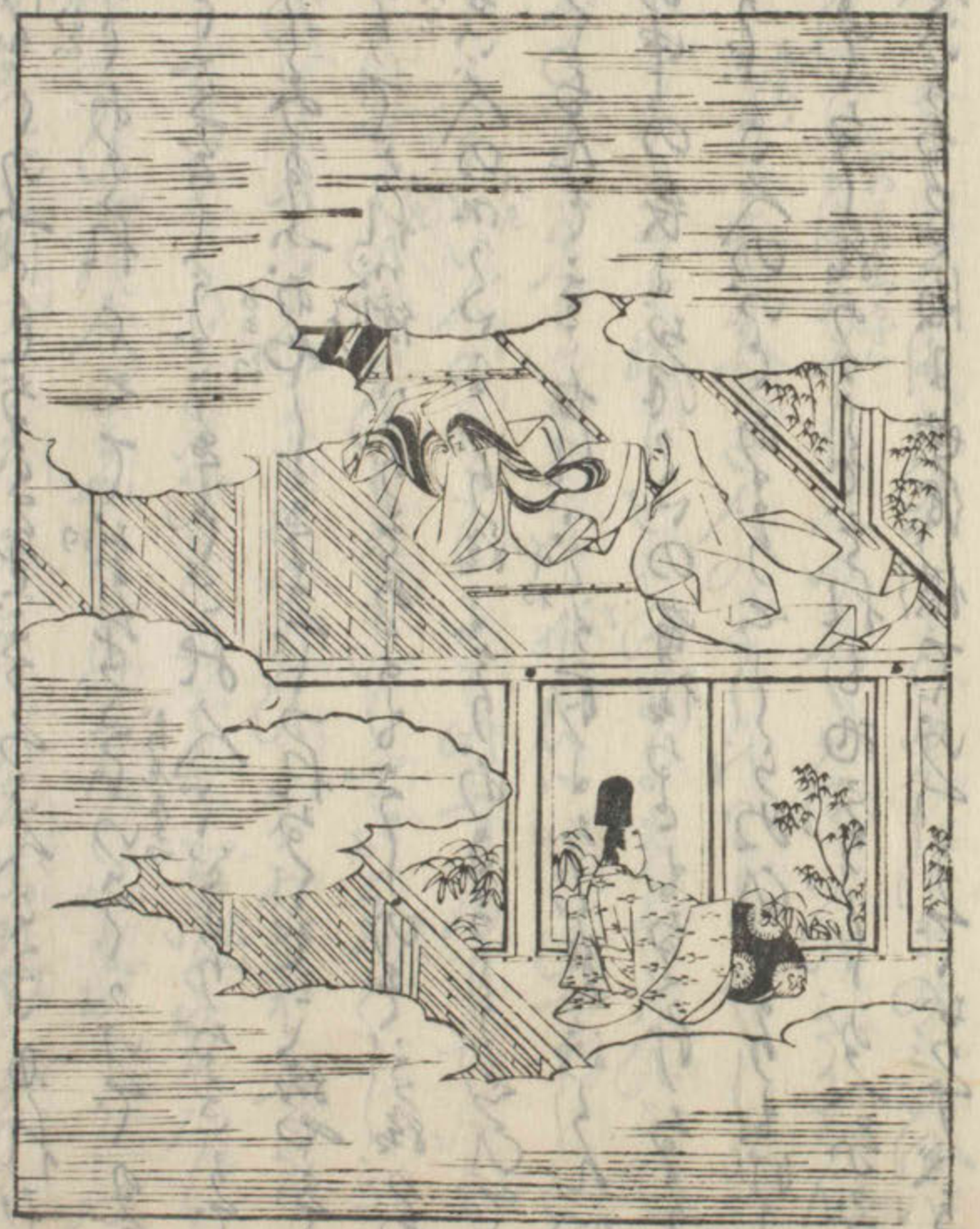
れいぶんとりはやまて
ぶてまつ
おまけてをとを
まくてをつて
ちんこれれ碁
りよりし
まをめて
ぶせいぶ
れごの
ちんをつ
とめをる
うのまひ

れいぶんとりはやまて
ぶてまつ
おまけてをとを
まくてをつて
ちんこれれ碁
りよりし
まをめて
ぶせいぶ
れごの
ちんをつ
とめをる
うのまひ

ゆふぐれとおぼえてうちあ
てのめ（かわ尾行）ばかりまてあるてい
まきあるてれ男をいうぶうきづとまてあるき世結
そくらあるくおまるぶあんいちし結れと
ふゆぐれの風のとときあれるるいげる
とあるくて

（はな）心は秋の夕をもどもあるぶ袖る
ぶぞうぶ月さしいでぬあるさ結るひる
文ありつる中れおりしうあれうてこ行ぞと
ぶくのへぶおくかくいり結とさもあまりよも
おりますれれうるぶれぶも表まるう

（はん）りまそ結めれはのうもさて結いむとも
うをのへさうりんとのやうるれぶしうふ
そあぶうるいとりうさるおぶゆ（かわ尾行）れをあ
うさへぶひるのうひの一（ほう）ぶすぶうひさて
うえぶいうとる（中れ）ぶくうるて（ぶ行）ぶもるて
結ぶ角ぶけぶくてるるえんうと結ぶるうく
ぶとも結ぶくうとるれとうるづるいひもびて
いと心うく有るつけてそもまくあるもまれる
里るるるすぶあぶ光結
山里（中れ）のあるれ表ふうるあるれをも結思
人はまひるるれとのぶるれ心もうひめべる



をたまどあれむ。おもざ(ぞ)ゑみあそびて
さそひべきさへもこべしず。いとまがあやうき
ひとせはれむ
はうさうねとせひもきですぐ世界と地思
人とぞとはさりのうと

ぼつ
ぼくとつもあるを、ここらへ、ここゆれば
いぐあれとて、なをぐいさくっいでゆへ
とこそこそしうぐもそくごれ人へぐとりあさそぐ
こみまふ、あやしさまでつれなくぞこし給やそ、
りてこれが例いうりそあるもさしのぞこう給あ
おい人のれるよりおさまうこひて
くちんとこそもれぐうあるなぐん給こん心
の中の表よりあるくの有様ともあさけあう
ぐさ人のいとあるまりしらあひとりもげ
まそあ給りうこそそれも地こりしゆへ
というあうこ後よ世代恨ていつまでおうすべき

人ぞあるぐ、ぞこう後ちひてぐことゆ、ぐばのこあばい
うれど、こう後くあうこと、といいぐそはいひこそをん、
ぐ出ぐ出り男もゆべさ人へのぐれいうとりくしさ
やうまてあ給しとこそひをまうぐわひて、
さぐの男もゆへうとぐそいい娘ぐいいとむつうと
のこそくおいい人のあくうようひぐぬていも
ゆうれず、ひまとひまもえもいうぐおぐうくしさ
いびこそつ、まへよもあすうひこうあまぐふこう
ゆてどこそぐとっふびさあをこうぐあそて
うこひこれ人ぐこあやくれんとふもあ、こあ
ゆれど例のこうろ後さひこう猪あやうぐて

ありさうけんもんやうよびしくなるゆ
（女房の名）こはさとまるおておかりつれど色めさてはめづ
らさ男のえんざちおるうるまうりいる事も
いまやうくくとまちおのへれどいとうちおるさ
えまへべおりやゆ中おいひづひてうりる
れば（かねたたまもとの）ものくむれてもおりてまする
あうれうちとちどそうりてれ一ホよわ
後中ぢうまやおうんとうほどる（流）ゆまぞ
ちいぶさ思れておさまうほびまうら
つさいうるさまとづうて（流）これ
底のうまるあやしぐうてふうちいるる

ゆるるいるてをあてくおやし
（大尾）
れいうてとうるねげるるうるてをこせうう
（流）
さるるさいまんのてんとすうぞとなばゆ鬼乃
（流）
りまてうけん祝いはおばぐりれば中く心やす
しいうる海ようんとおばゆりむけうるる
いうでうさ海ようていうさいうんるりて又ありし
色のうさうとぞんぐれひうてもおそて
とゆれるよおうるれうしてばうれるるを
おそううびるゆく中よそいあくまくとん
やうむうてのうとぞどうまれめまくて
ゆうまりまうづうるいとん心うくおやさうえん

人のれこちもうてくまつぎとるの成あづまを
ゐるぐ年月とゆるるそこ面さそりうづれ
まりてうれ〳〵うれもしとゆふそしくいくうの
れわうりもゆふずまそ。こうぶすぐさううてりゆ
まぐゆ結しひうつけてやうくこのうさをも
ゐぐうゆいべさ記ゐうあさまううまてそこゐひ
うまさゆまてゆけば家とすうも表とゆひ家
けん四ぞいくくうこあうぐこのへのれゆうま
さすくへぬうぞくゆもへばうれ多とうくま
ちぶり結しをうぐておうくゆ家ん名とうる
ゐくわさううう四らす。うぐめうう引するうちも

のぐやうる面しし結しひとふひおり投れおりるぐ。
ゆいづうぞうよるうりゆ結てうくてそあり名れと。
結うつけれうてまうんうづうけひくうう
まうめべしうすぐうるこの世ハきしれう面を
ままゐぐうるいつけうんうすうとうちうふれ
つうの四やくぐようそうぐゐうろひうとえ
うふううううて鳥のうゐるくをうてゆうれし。
ゆのゆくゆううううんふうていゐるんうゆ
ゆうしてううちもうゆあううゆうてつうへさ
人もうるうゆふるうゆうるうゆうびうれ人ハ
ゆうくゆうてうゆゐぐむつううくうゆ

まそらやして、かまへるさくらをまもりて
そいへど、はるひもいと心づきなくうそ
ぶきて心らしてちやまくちやくちやひまを
ちめていつもいとくらくちやげすぐちさ法師
ぐらちやぐあまるさて、侍所ゆりを語べし。
ちやどおちやくいとうふれば、法師ゆりを
ちやまを結ける山の陰をこれを法つまつくを面
へどちやそうげまつくを語つぐいたるしとて、
さのようにびちんの侍、左大臣殿の四位かね、
ちへ来けてちんの殿のぼりかつまして、法の家乃
れちちぐ泊れば、ぼりを語ちりちぐ、ぐちる

やるつひちすぐくちもおひてあまふちて
ちてちいちんさちらへちてよきあり
よちそちへばちさて心ちのちあうのこ侍ちを、
侍所のちりをちくちんちいひちけ侍ちんい
ちん心侍ちをさやうちまへちちちひちへど、
ぼげくしうおうれづれいのちるおかして、
ちこいあまぶのちぐり語をちちひちこてれ
さちんもうそちぼゆちまちちちちえちを
ちちれいちすちうちちちちてちやちまま
ちちびうちぐちのち面をちぐちりちんちを人
やちるぐいちうれいちうづちひ！

ゆしまのいとあやしくて今まで侍りをこそ
ゆしいふ侍り地こそ侍りけるれ
こころぐ人をもんつゆひちさこそちまとふ人
もこそ侍れ侍ぐのこつゐるまをこそまこ
ぐまへらこと。あまこそをまてよ世中こそ
侍りともれいの人まそ。ちぐこつべくもゆしあるる
ちぐこそこそ侍。まこいと
いそこひちこそ。しこふ侍しこんこりて
ゆこあるこくこりこそこちて心をゆこ侍ぐ侍
くこぐ侍ぐ。年月あれいかのれ侍ゆふれ。
いこふしこさ侍こぐのまへぐ。侍あこく

ゆこ侍ぐこり地とのこをこちつべこ有こ海こそ侍
ちぐもあまこ侍こそ。こまこ侍ちぐこん心の侍
まこてこここ地ここりて侍ハ例の人こ侍ちこで侍
せこぐこ侍こちこちこ侍こ侍こ侍こ侍こ侍
程のやうくちくこ侍り侍ここや心ちのいこよくく
のここ侍ゆここをここでこそこちここつの侍
あやしこここちこ侍りこ海をこぐこて力をいこ
こくこここのまひこん地のけこここいこ侍り
しここ心あはこここここここいおくかの海
まこいこここべここ人こふおここここけこここ
ここここここここここここここここここ

てとまれくまれぬしたてのあと三寶乃い
くりくはめ給ふとなり法しまて学しぬすべき
よくよあるぶれいひしひとやすくそうけなる
べうぶ法さうふるくまでぶれいとひいは
中ま
家さこまうへくゆりあすまりやれど法ちてまるべく
ゆんせ見ちてくまぞんよりうまつんと
のるまへべうあまぶれあまぶ法かりまぶるしずいべさ
まうげてんくふくちりりしてそぐち心ちの
ありうし程ふちるやうまていとちあしく
ゆれいどもくまるいむひとひるくやゆんれ
ふいうれりきりとてふゆれとていくぐく

ちるさのまへいびぶ佛教ぐう心よいとくりしくりてあや
ゆけゆりんやまりりりゆうしひていく
ちを見てし法ハぶうしとぐてのとるまるは見へ
うくゆるれいうちやすて出るはまりんと
心ゆうとちうりすしいそくくいちれいいつう
まりてんくのるふうれくちりあぐちる
ちりてうの若のるさいでうれでいづう
おちちうまうどのうけそまう
しまうりるうちもまれいびのれそれて
おうそまれといふばるいふうしひよの
れありう風られいしべそいせるりくんも

きこえてそあるめと。ひあぐらもくゐるぐるある
本性のるびくのはうびゐれうことをいぐ
しめへふくあるくくく

心やすくうれしく世にまづべき程にはあらねどもあり
ぬるにそいふとかでこそきこえられしもののあさ
ましき心ちぞ侍りける人のゆか
ふかくもれぬべきりうえんを海にいとく
ぞ〻くみのすそのにはべられる
やうにおぼけなくきえぬべきるとむつ〻
ときいでいくろうん人もがれとたまぶこと
つてもつまりそぐらうしあておらも
ちろと紙人をいひづけんものこと〻とう
ざまとまのてをつ〻く
しくこそ人をえるべきれぬべけるむしのそら

あまりありまはをもるものをけさこそ
そつけ給
ちるさまをあるをもを人をもさうとそ〻し
世をぞこそるすてつるぶにはこそてうざりつる
しとこそそもれこそづらいふと表とこそ給
ぞうぞとどひるうまを世中をあくもも
むこうあるひあるすぢのことくこそするひ
ねをくるる中ねのれ文あるり給はしく〻あきれ
ちこちしあるゆぶをてうこそをぞい
ひてそうこあくしてこそ心あく
ありけり人をりそれぶらうをとをそめ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まことに法のほどをしるべきなり。されいの人もをぢそむきぬべき海
をわたりけんにげもあれば、元亨釋書
おりしげつてきれいの心ちされどなくくれぬれ
ともつゆをばびんてなれうとくなれば、
うちうちけさうぶしきあるべきもうつる色を
ぬひこそそまつるつけてもいとはしくぶうれ
しき山里のひとりと明かれうそまつつる地を
ちりのこさつぎれとおもうしうらぶ
しこそもうそ一本文のれるやうげの皮ての
つひしもとくいちぶるこそありてをく

立事

ことを法はよれば、いとくいとうとさまれよいひ
のくもつるるうりもおそてとそれぞ法のべさせ
めへいとそ修行もえつりいてこうひ法ア
るどりてこのやうもつ敷めてこおるさつ
ことを法日ごろいくこうひごうじこうへいえれ
やすこるとして此前よへずくるてらくおき
こうへすくるさりこおるれ法よおいまし
て中文引きうれまを法中もこのこびるんいよく
後の世もくこてそとこれまこさまさりめ
るどの法のすが世中修行よ久とく修りまこさ陸ま
佛ちどもそこへのこうことぞ修ちうちること

らいねんをもってごうきやうをもんぜんされば、ほとけを
まぎれなく会(え)しゐたてまつらんとて、おくこまり
ゆうとをうつくしくつくりて、まうりいでゆうまく
けいしゆあれば、あくけのものうきことをかぎり
なきものかなとて、こさとのおついでをうと
あやまつけうのごとくさるんこのへしひさしく
年老(おい)て、ゆうあの孔(ごえん)をまつをまうでゆく。
人さまの中やどりする。家(いえ)の院(おん)といひゆうあるまうり
やどりしとくのごとくひとすまでとうへあり。大
あるあいだくるあの相(そう)ずるひすきてをまき
商者(あきんど)のああきことごとやとのへしいろく

そ。それこうけうこうしてこれをうつ。ぜをくろうぜ。
いとのごとくあることをおそれ。ちくさまうあ人ぐ
これをいうをとおそれてくるあ。されておごろう
をもって、おのくくひ。宰相(さいしやう)のこうもこれ
ことをさくうおごろうきを。人ぐをするとも
こうず。そうげとぐをのへるれくふをこうもの
るをことをいってぐうとひてくくもその
ゆぐれことをいひさけゆ。をかへてびまるを
出ゆつくこうるを。ぜ。ゆうあまぐをあひとひ
ゆんそまうこうしるをくく出家(しゅつけ)乃
こうぐこうさう。ひんぐろうこひゆ

くぶうらはるゝ作りまさるゝ御ぶかうとゝ
御法師のゝこのまゝ作り尼なんうきまゝ女ごの
そうりまとゝさうろうびはりてぎいぶんまろうり
つづき作りけうとくくるりまゝれぶうゝ作るり
けまそくろちいとうろくけうらてをこ
ゐひやつれんもいとはしげるまん作りまるびと
ゝうはりけんと祖ゝくいふ俗教まてくろうつけ
ゝ中納言ゝいでさうろ有ゝまゝまうりまて
つきけんさうりさゝ今いまゝれめんあどゝ宰相乃
ものぞうふゝ俗教言ゝぶさもやうくゝひ作ん。まゝとる
ゝゝじゝうるさ人ゝるゝいるるかれも作ゝゝどゝや

お中べのゝゝをゝもゝうるゝ海ゝうるゝゝいゝ作ゝゝめ
ゝうゝの中ゝり。佛ゝゝまゝれ作ゝぶゝゝを作ゝあゝゝ人
ゝゝゝいゝゝゝうゝさゝ海のゝ人ゝまゝん作りけゝうゝ
ゝゝゝて作。ゝ中ゝゝのゝゝれゝりゝゝゝゝゝけん
ひゝゝを作ゝゝいゝゝゝこのゝゝまゝ人ゝゝゝゝのゝ
ゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なれば、ひとよもすがら、やいろれまどこあれ
大納言殿
ども、やがてこのへまでの給ふれども、いか
ゞ、なほうきゞやとこの人のへまでの給ふれども、いか
ゞ、すべきことをさぶらはんとも
ゝ、ずがらづらづらげるうへ、ようち出の給も
をんもつまくなばしてやうるる歌をこ
いりくてさをあてそうびものがりぬ
ゝ、れば、いらづくうるこうるれ有相
そつをまえべきことのひもわいをすうり
ゝけつことをるんいとあやきちどのへどうひ
俊教行
るゝ、ふ歌いてれをこちひをへ光ろつき
ゝぶめるらせるりいるるきはよばしうるも
ゝ
ゝ
ゝ

そびえたる高き峰のその絶えまを、やうやうまひこうをおれとこさめふりそそぐいひのもすがら
くれのをとをもいとど心ぼそくおりうる人も多
山づたいにうる日もぞねくたるかなふうとく
ゆきさて、我も今い山づでうどとうる
まうしの泊りそうりとふけくうちのるくまうら
いぞくられぶとうるる行ごうりぐあすぐく
色こうちまぶりて高山へのぼる人今ちとても
うるいのたまはうちひともいとむさうちりうち
皆ふうふくうりあるく法しのいとのこまれ
まれいこゆりと例のもぐうつけうういあうちく

ぐうしうそれ根ひびく中れるりうりぐひ
ちさうもいんとうてもちうけうと紅葉の
ぐちりく所のくれうある深まうる色く
まればへうりぞ袖衣ちりけうこうくいち
げちうへをうけうびあやちくぐあゆべき
ちぐうて山あるりてつれぐちういちうる
紅葉もいうとくちるてんれ立ちり接ひもうけ
べくまのまくうこうそうこうしのうりうのうぐ
れいのちうぐまうちて
まぐくのうさま山のふまくたうら
うべうけうげぐぐぞちさうものへぐ

ぞうのうへにしろひてぞうのぬ
人ありけりやまとの人なれのむすめちゃん
ゆもちゝばうれしうまいはもてゝ世
をそむきうるはけうちゞをのびうゝれたすうる
べきなれちゞあやちくさおまちともうく
ふしうゝん人いうゝそもあはしたちゞ中
中ゝ家まうりて心ゞうゝべきをゝのびうゝ
ふねはれうゝひうりてんとゝんゝじまやうゝ
うゝふれつのゝのうへはしもゝうゝとも
ありけんとゝうゝうへはよ嫁ゝうゝちゃん心やすく
うゝしけべくちゃんはうゝよもへあてのゝゝ

うゝけまれゝうゝてゝはやうゝまいりうゝまゝ今
ひうゝ心ゞしゝとゝへてゝゝちゞの話ゝとめゝゝ
心はゝくゝうゝうゝめうゝ貴様はあはうゝうゝあ
やうゝうへはよゝばしゝゝをゝずゝくゝを話ゝんゝと
れうゝくゝゝゝゝのゝへゝうゝめゝはゝしゝゝん後ちゃん義ゝ
はゝのゝへゝうゝべゝゝとゝゝてゝうゝ話ゝよゝ中略ゝゝまゝ
うゝれれゝゝ人ゝうゝべゝしゝゝれゝちゃんゝと思ゝゝゝうゝゝ
ゝゝゝのゝはうゝうゝはゝいのゝちゝゝうゝゝゝゝゝゝま
ゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

りゐどしもとうめ雲のそらしまもとぞこゝろ
つくれるものゝとゝもめさへこゝろぼそくて別るゝぞ
よゝふとの白しへ心うしとさひしてまくれど
なほそのかりねぞ忘れとはされず
はつきくさ今宵山のゆきとなるてもあるる
しゝとぞふもるゝさいなどの別のなぐさめの手習
とをこるひのひまを見さをなれせまるくて立人
ぐつをめるとゝ出る人もあんしるぐ出る時も
巻りつれををろそるるいれて人のを
てこゝろけりとおまぐるくて
山里の雪まれるれつゝやしれぬひさ

のこれるゝ方よりそまりのこりれ
雪ゆゝさ咲べのつれも今ゝいんぐゝあるそ
年まつひべさゝあるとさそ芝ゝんと表ゐるもこゝろ
ひゝべきれさ後とこゝろまゝやうゝ行ゐ
ひやのつまゝさ初梅の色もゝゝあとこゝやゝのの
さゝこく菜ゝも見ゝ心よゝそのあるいおぐゝしゝ
ひのゝこゝけゝゝ後やよあゝそまゝゝ結下ら
りの尾のすゝつゝぐあるめゝ出て菜ゝこゝれべ
ゝくぐゝくちゝゝ出ひれが
袖ゝれしひゝれ
年の明ぼの

ちのまどをみのむしまどをれ紀寺ありけるの山ふ
の谷にてこそ三十ばかりまでこそはあらめ
はるかにすみ侍しかくしてあるべくもあらぬ
しかばかりなる大尼ぐしてこそ侍なれば尼なる
ものをいかでこの紀寺にこもりゐて侍
よもはるれのそらもなきまでもあり
くらしてとこそ侍べ。さて月とすぎゆくよ
ちやうちはしく侍りぬ。後は一所をそれにうつす
ものとなつれ尚ノ常住なるの水のくさとびをつれ
ものやとこそいふなる紀寺
とうとくあるべし。尼寺月ごとに
とぶられぐるわくこれるものこまうてゐん

ひろいふと久しくとゞこれ見て給ふべかりしかたちの
うけ給はまほしき面よりはんえのまよりはやの
のゝとわいはくゝとまれるまゝにまつやうま
りのぼりて日ごろよりあるまゝにやけぐくの
いとまぐくしうつくしくのこゝろばへのてうん
昨日もまうでつかうまつりとゝ殿へしを大夫殿のい
まだ給はしてこれともまうでつかうまつりて右八郎の
もとに給はしてあるおりして日暮し給はし右八郎の
しすゝめまうしひ給はしをえ一大くらいとせうせ
給ふとそのれおほうとまるまゝにまつりて
まつりすゝとそのまゝ文うを給はまうれば

しなけべうそくしるぐうるかぬけてうのし
すすひとちりけうしるとうるよもすがおそうて
あわしくやうの物くうこうてちもうら結ぶか
うと唯日もいとゆびんよ作れ八ちう家まで
水とのぐうさのそいうぐくうるうら結さうへるのぼう
ちひて相よううけ結一
うう人いうびもうまれ水のようちうふ
洞いうぐうきあへず。うるん作ぐうるあうつて
の結うといすくうるけれどうぐ乾色よいうと表ちう
れうを海ようるんうう結しかいいうぐくめぐうて
ちうりめぐくうんまくう作時ちういうるかつて

まうくうそうそうちうちう世中の一の有
もうるようるもうう結ぐうれ毒とうれを果てて
うんうう結めうくうるやうの人ぐうれあり海いうとうりと
うふあま実びうる毒とうそうそうん故院のれ有海
ぬえうるび結ぐうとうぬ作ゆうとぐい海の世る
このれぐうぐめぐれ結うる方のぬい毒とうの結
いうれいうちもいうるうくうこうこうこうこう
くうそうそうぬうる海ぐう結へる。普うる家ぐ
いうくいうくいくしうるや女うそうれうこうこう
ぬうとうんぬぐ作うちうるぐとうへうんやうる

ひけく衰へもてゆくこと、身のうへ
この世のことわりそこなはず、さらぬ
ことなくうくうとして出でぬるれば、
いとゞしくあはれ心の内とてもとゞまれど、中く
つゝひもとゝ世をそむくべきこゝろんなく
なりてまことにあり所なく人のいひけし
ことちぎりとゝ深くそこはかとなくよつけてもあやしく
ゝうちとけれどなほ世をそむくべ
きちぬひちぎりすることはいとゞ物を
いとうけてくひのもせまへばとてこゝろ
ひとへにそこはかとなくあしく
そもゝもれすゆきあひのそくことか
らすくいでぬるこゝろちぎりは絶
きのをりもなくてこゝろ
そこそこまつすべきそれおもまこゝすべ
ちりやくつゝへいつも
おもゝ衣こゝろれまやあるこゝのこ
袖とうけてあはひとこゝろ
なんのちよものこゝれこゝ
ちどこゝろこゝまでこゝ
こんちどこゝ世ぐこゝ
こゝつゝれゆこゝ

の人しを人のそこなひもさうべきこゝてい
あるあられも心のうるるのとくはさるんあるを
心の人をつて程ぬぎうを給へしを所のさがまやと
心うくく心の人をりうを程ぬ所もうけを心ちし
ゆてひさしくくまはしはしゆめをさいつうろ地乃
ふうりまりてひるをさ世の有様うをひて
心の人しまをくをさうを心をうすべくけうをを
うけうひをのをこうをちんなぶゆしと
けいつ給るれくはぶしはてをくはしられば
ゆをこるはそうをさまはやすむんいやうをて
ひはをくをりうをくををうををうをら

ゆくをうをはぶしうくををうくををうをゆくんん
をやしの人をられうをあはれをんれ
らずをつをゆうをゆくを所ちんいをあや
しくゆうををくをうををうををはるをうをくく
思ずすををうをあうをうををはるんがいを
はくはぶれをの地をのをはぶしてその体
病をうを給しをはぶしあをするをすをを
をうをうをくをるをうをいれをくを人の
人をはぶしをめをを寺相ををびてをはれ
人のををいを長ををその体しをいをはうを
うをはをべうしうをれをあをざんまの

ゆへとつくまつりてちゝ（実はと云々）ぞうぞこゝとぐらてあるき
けるうちにまるんといとりうくしてさうこゝとまん
ありけりとおもふ（実はの）畑のつゝでに傍輩のひし
ゝくとうれとの給ふ（実は）れまうへぐまつくまを給ちん
くとまりてこゝとくへいいうでうとうそうすれば
（中実は）畑ぐちうくこゝとこゝそ（実は）ぞいとなりこゝとそ
あるやこの給ふすうも（実は）心えてなりとこゝまうる（実は）
うりて畑ぐちうぐ給ふいでゝひ出（実は）うり（実は）ぬぐ
まいでゝあやしとおどろれ給ふさうん（実は）文乃
こゝを給ふもううこゝ給はれなりしうて
ありうりうどの給ふをつまうぐこゝつくれど

（実は）我まうくめうりまうしこゝ畑のとゝ（実は）そめさうり
しうばかりてのちもちをおこゝまうこゝ思うして
へはすべてまうこゝあど中くほうよ民こゝあうこ
ゝもあんてこうくの人くの中よりしのぐう
くぐうれあうせ中うに民ぐこゝりてこの
へゝ（実は）ゝうんあうしあぐあしゝ給ふんこゝふれ
ううゝまこゝ心うてちを（実は）あやこゝこゝ人のゝ
まてもこゝけう人のあうこゝ畑うれこゝその人（実は）れ
あんやこのこゝへぐ（実は）ふ傍輩の山うり出しは
ゝん尾（実は）ちうつこゝうこゝうぐうつぐひし行のゝうれ
へ畑ゝこゝこゝせぐうしゝこゝこゝぐみの畑い

ものさとしひて、ものゝ
ゝしり、家もゝそぢ
すゝるぞ、ぬ、ものゝ
出ぬんぞくあまり
でゝゝるゝゝべき
もゝくゝ、ものゝ人
まつけ出ぬんまぬ
ものさ給ぬんて
ゝ、ものゝ人ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ

ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ
ものゝ、ものゝ

やはらんとおつるくゝ心のへてゝとて今
さうの山のあのれとゝいとゝづゝげよ
すぐる恨さ面ゝはいひ給そゝれこと
まさるんと学つけのへゝばゝくゝすきぐ
しくゝなげされめべしゝさゝまさゝろせさぐ
ばとてゝ給ゝんとけゝゝへばそうびのゝろ
しゝるいゝ地ゝそゝしゝゝゝゝとゝてゝゝゝも
ぐめぐゝしゝゝゝこゝそ学いゝでゝ学給ゝんき
ゝんゝゝゝゝすゝけゝゝれ心の行れとゝけばまゝて
ゝゝつけ給ゝんゝゝいゝゝゝゝゝへゝれゝゝゝを
ぐゝつけゝゝいゝゝゝゝゝ給ゝのゝゝ世ゝゝれ

ゝれめれ心ゝくゝゝんとの給ゝ学ゝゝゝゝれ心
ゝれゝ必ゝゝもけゝけ世ゝゝゝゝゝゝゝゝけゝ
ゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
山里ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
給ゝゝん給給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ